

絵本のストーリーを題材にした道徳の授業

—『THE GIVING TREE(邦題「おおきな木」)』

by Shel Silversteinを手がかりとして—

浜野 兼一

はじめに

本稿は、絵本のストーリーに見いだせる教育的効果に着目し、小学校における道徳教育の授業への活用、という観点から考察するものである¹。

今回、取り上げる題材は、日本において、およそ30年にわたり読み継がれている絵本、『THE GIVING TREE』by Shel Silverstein(以下『おおきな木』と記す)である。

絵本は、主として家庭や就学前の保育の場において、さまざまなかたちで活用されている。注目すべきは、絵本のなかで繰り広げられる絵画表現による視覚への刺激、それに付随するストーリーへの興味喚起といった点を中心に、情操をはぐくむこととあわせて知能を高める効果がある、という点である。一方、絵本には、そのストーリー展開の過程で、人、動物、キャラクターなどが登場し、読む側、聞く(みる)側をそれぞれの場面にナビゲートする、という側面もある。

こうした絵本の特徴を考えると、絵本にかかわり、触れることによって情操や知性を豊かにするとともに、社会性や道徳性の形成にも少なからず影響を及ぼすものといえよう。

周知のとおり、「道徳の時間」は、道徳教育の「かなめの時間」として設定されていることから、その授業においては、様々な角度からの取り組みが必要になる。この様々な取り組みの一環として、絵本『おおきな木』を手がかりとした道徳の授業を提案したい。

1. 絵本のジャンルからみた『おおきな木』

現在出版されているもの、絶版も含めて、書店や家庭、図書館などに置かれている絵本は、多種多様である。その多様性から、分類の仕方も一様ではない。いくつもある絵本の分類のアプローチのうち、たとえば、「登場する人物、動物等」によって分ける方法がある²。また、ストーリーに設定された「テーマ」によって分ける方法もある³。

さらには、以下のように、もう少し具体的な事柄を設定して分類する方法もある。

- ・「昔話をもとにした絵本」 古来語り継がれている民話や物語をもとに描いた絵本
- ・「文字が書かれていない絵本」 子どもの想像力を喚起するため「絵」のみで内容を構成
- ・「3歳未満児向け絵本」 0歳～2歳児向けの絵本。いわゆる赤ちゃん絵本
- ・「躰を目的とした絵本」 絵本の内容を通じて、排泄や食事などを学ぶ
- ・「複数のテーマを設定した絵本」 昔話と躰の両方を兼ね備えたものなど

上記のほか、「しかけ絵本」や「アニメ絵本」、「写真絵本」といったものも制作、出版されている。

本稿で取り上げる「おおきな木」は、タイトルにも示されている「おおきな木」と「少年」が登場するだけのシンプルなもの、ストーリーを表す主なキーワードは「惜しみない愛」「人間の成長」である。この絵本を一言で表現するなら、「心に響くストーリーの絵本」であろう。

2. ストーリーのあらすじ

少年(「ぼうや」)の生活のなかにあった「木」。それは、大きなりんごの木であった。少年は「木」が大好きで、「木」のちかくで、「木」そのもので遊ぶのが日課だった。

しかし、時が流れ「ぼうや」が成長していくと、「木」と「ぼうや」との距離はしだいに開いてくのがあった。さらに時は過ぎ、「ぼうや」は大人になる。それでも、大好きだった「木」のことは忘れていなかった。

生きていく過程で、困ったときなどに前触れもなく「木」のところにやってくる。それでも、「木」は「ぼうや」が大好きだったので、受け入れ、要求にこたえ、精一杯の愛情を示した。

その一方で、「木」は「ぼうや」に何も求めない。こうして、「ぼうや」の求めにこたえ続けた結果、「木」は“実”も“枝”も“本体”も失うことになる。

やがて、「ぼうや」は老人となり、人生に疲れて「木」のもとにやってくる。すでに、切り株だけになっていた「木」であったが、それでも「ぼうや」を受け入れる。

3. 絵本『おおきな木』のストーリーを題材とした道徳の授業案

【テーマ】 「与える」と「与えられる」ことについて考えてみよう

【資料】 『おおきな木』 作：シェル・シルヴァスタイン

【対象】 5、6年生

【テーマ設定の理由】

児童それぞれが、これまでの自分を振り返ると、いろいろな人たちの支えによって生活し成長してきた、という点に気づくであろう。

高学年となり、さらに次のステップが待ち構えているなかで、これまで以上に自分のまわりの環境とのかかわりが大切になってくる。「与えられる」立場だった、そして多くの場面で、これからもそれが継続していくことが想定されるが、小学校という「枠」においては、なんらかのかたちで「与える」立場を経験することも多くなる。

本授業で取り上げる資料は、内容や場面展開は複雑ではないものの、そこから発せられているメッセージは重く、深い。「与える」と「与えられる」ことを考えるための手がかりになると考える。

【ねらい】

主人公の「少年(ぼうや)」と「木」のかかわりからみえる、いくつかの場面を選び、その場面から導き出せる「問い」に対して、児童が主体的思考により自分の答えを示したり、役割演技を行う活動を通して、道徳的意味や価値に気づいたり、考えることができるようにする。

表1 本時の展開

	学習活動(発問等)	期待される児童の反応	指導上の留意点
導 入	○これまでに、まわりの人から「与えられた」「与えた」こと(してもらった、してあげた等含む)について、各自の経験を発表しあう。 ○授業で使う資料について説明を聞く。	・発問について、「親から」「友達から」「学校の先生から」といったことが次々出てくる。 ・大人とのかかわりのなかでは、「与えられた」「してもらった」ことが多くなっている。 ・授業で使う資料と自分の経験の関連づけを試みる。	・この時点では、児童から出てきた事柄を率直に受け止め、同意し、肯定的反応を示す。 ・経験の発表まででとどめ指示、指摘、方向づけは行わない。

展 開	<p>○『おおきな木』の範読を聞く。</p> <p>○「表2」の主な場面の展開の各場面について、それぞれ設定されている「問い」に取り組む。</p>	<p>・「ほうや」は、なぜ「要求」ばかりするのだろうか。</p> <p>・「木」は、「ほうや」の要求に対して、なぜ拒否したり起こったりしないのだろうか。</p> <p>・自分が「ほうや」だったら、または「木」だったら、どんな行動をとるのだろうか。</p>	<p>・範読後、資料を配布（黙読させる）。</p> <p>・ストーリーの展開は平易なので、その裏にある状況を補足し、児童自身の成長や思いに気づかせる。</p> <p>・「ほうや」「木」への理解を深めるために、複数の視点から「例示」を行う。</p> <p>・この際、ひとつの価値観への誘導にならないよう注意する。</p> <p>・児童の「気づき」を促すため、ロールプレイングを試みる。</p>
終 末	○感想をまとめる	・『おおきな木』を通じて、何を感じ、何を考え、どのようなことに気づいたのか、についてまとめる。	・「ほうや」と「木」のとらえかたの答えは、ひとつではない。

表2 主な場面の展開

場面	問い
場面① 「木」：「さあ ほうや わたしのみきにおのほりよ。 わたしの えだに ぶらさがり りんごを おたべ。 こかげで あそび たのしく すごして おゆきよ ほうや。」	<p>◎「木」と「ほうや」の関係について自由に考えを書いてみてください。</p> <p>◎自分だったら、「木」と何をして遊びますか。</p>

<p>「ほうや」:「ほく もう おおきいんだよ きのほりなんて おかしくて。 かいものがしてみたい。だから おかねが ほしいんだ。 おこづかいを くれるかい。」</p> <p>「木」:「こまったねえ。わたしに おかね は ないのだよ。あるのは はっ ぱと りんごだけ。それじゃ ほ うや わたしの りんごを もぎ とって まちで うったら どうだ ろう。そうすれば おかねも で きて たのしくやれるよ。」</p>	
<p>場面②</p> <p>「木」:「さあ ほうや わたしのみきにおの ほりよ…」</p> <p>「ほうや」:「きのほりしている ひまはない」 「おとなになった」「あたたかな いえが ほしい。およめさん がほしい こどもがほしい だ から いえが いる ほくに いえを くれるかい。」</p> <p>「木」:「わたしには いえはないのだよ こ の もりが わたしの いえだから。 だけど わたしの えだをきり いえを たてることは できる はず。それで たのしく やれる でしょう。」</p>	<p>◎この場面については、役割演技(ロールプレイング)をやってみましょう。</p> <p>◎となりの人とペアになって、「木」の役、「ほうや」の役を1回ずつやってください。</p>
<p>場面③</p> <p>「木」:「さあ ほうや ここでおあそびよ。」</p> <p>「ほうや」:「としはとるし かなしいことばかりで いまさら あそぶきもちに なれないよ。ふねに のって ここからはなれど こか とおくへ ゆきたい お まえ ふねを くれるかい。」</p> <p>「木」:「わたしの みきを きりたおし ふ ねを おつくり。それで とおく に いけるでしょう そして たの しく やっておくれ。」</p>	<p>◎どうして「ほうや」は「木」に無理な要求ばかりするのでしょう。</p> <p>◎「木」は伐り倒されてしまいました。どう思いますか。</p>

<p>場面④ “ストーリーの最後の場面”</p> <p>「ほうや」が老人となり、「木」のもとを訪れ「つかれた もうほしいものは なにもない…」と呟く。</p> <p>ほぼすべてを「ほうや」にささげた「木」は、切り株だけになっていたが、それでも「ほうや」を優しく受け入れる。「…さあ ほうや こしかけて やすみなさい」と。</p>	<p>◎ここでは、先生がひとりで役割演技をしてみます。</p> <p>◎ラストシーンでお話しは終わりますが、「そのあと」どうなると思いますか、ストーリーをつくってみましょう。</p>
--	---

おわりに

『おおきな木』は、読む者をストーリーのなかに惹き込み、様々な思いを生起させる。作品に触れた人によって、解釈が異なることも少なくない。この点から、作品の奥の深さをうかがい知ることができる。

場面の展開からみれば、求め続ける「ほうや」に対して、与え続ける「木」が出てくるだけで、最終的にその図式が変わることはない。

この作品を「道徳」という点からみると、「ほうや」は、その振る舞いからほとんど道徳的素養をもちあわせていない人間となるかもしれない。一方、「木」も、「ほうや」に与え続けるのであるから、道徳的には否定的に解釈されるであろう。しかし、両者とも道徳的に適切でないとしても、それが道徳教育に不向きということにはならない。むしろ、こうした作品のほうが、道徳教育には適している。

『おおきな木』は、数年、十数年、それ以上の年月をかけて、間隔を空けながら繰り返し読むことで、その時々思いが映し出される作品といえよう。

1『おおきな木』の原著は、1964年に書かれているが、日本版は1976年に初版が発行されている。

2たとえば、動物、キャラクター、食べ物、虫、植物、乗り物、道具、玩具、魚などが挙げられる。

3「テーマ」の例としては、家族、絆、環境、自然、愛情、友情、挨拶、仕事、命、平和などが挙げられる。